

人を信じられる 公正な社会を

(2006.1.6)

JANUARY 

近所の公園に遊びに行くと、子ども達が集まって来た。楽しく遊んでいると、小学校2～3年生位の女の子が3人でやって来た。声をかけると、顔を引きつけて逃げ去った。私はとても悲しくイヤな気分になった。本当にイヤな社会になったと思った。家へ帰って「ヘンなおじさんに声を掛けられた」「小学生が連れ去られそうになった」等となり「〇〇公園に変質者が出た」となって、広がってまいかと思っただ。幼い子どもが犠牲になる事件が多発した。人を信じてはいけない社会を子どもの頃から教え込まなければいけない社会は異常である。

昨年は、人間性悪説、性善説を語っている記事をしばしば目にした。こうした社会では、人を信じられなくなる。人間性悪説ばかりはびこってしまう。昨年末の耐震データ偽造、株の誤発注にしろ、金儲けのためには、人を危険な目に合せたって、うまくだませればいいのだ、人が間違えたことが明らかであっても、間違えた奴が悪いので、素早く動いて、うまく儲けた者が勝ちである、というのはどうもおかしい。就学援助が4年で4割も増えているとの記事もある。塾に何十万円もかけている子がいる一方、給食費も払えず、学用品も買えない子が増えている。決して公正な競争社会とは言えない。アウトローの戦国時代のように、刺客を差し向け有無を言わせぬ異分子排除、面倒な議論は無用、勝てば良いのだ、儲ければ良いのだ、法に触れなければ何をしたら良いのだ、という風潮は、子ども達にどんな影を落としてしまうのだろう。

競争、拡大一辺倒できた価値観を見直し、公正で真に豊かな社会、子ども達が心豊かに健やかに育つ社会を目指していきたいと願っている。



心豊かに、健やかに

(2006.2.1)



「心豊かに健やかな」生活は、子ども達ばかりか、私達全ての人間にとっての願いである。「健康で、ゆったり、生き生きと」生活することこそ、幸福な生活である。幸福な人生は、第1に健康、第2にパートナーや仲間、第3に生活していけるだけのお金と生き甲斐（仕事・趣味・希望・夢）があることだと思う。健康や生き甲斐は当然のこととして、みんなが同意するだろう。しかし、この社会は第二のパートナーや仲間と、第三のお金についてはおかしくなっている。

若い人が結婚しなくなった。夫婦という社会の最小単位がなくなっている。一人であるより二人である方が、嬉しい時には喜びが二倍になり、苦しく辛い時には、悲しみが半分になる。お金さえあれば、便利で何でも揃うコンビニ社会では、一人でも気楽に生きてゆけるだろうが、何とも淋しい。決して幸せとは言えないと思う。寒い日には寒いねと、暑い日には暑いねと、共感し合える、そんな当たり前のことを言い合える相手が傍にいることが大事である。「人」という字が一と一が支え合っていてできるように、人は一人では生きていけない。この社会を作っている自分以外の他人の第一が、夫であり妻であり、そこから子どもができて、支え合う人数が増え、家族という一つのコミュニティーが広がる。更に、家庭のつながりの外に、親類縁者、そして近隣、職場という絆ができていく。これが人間社会の正常な姿なのである。核家族に始まって、家庭が崩壊し、さらには地域社会が崩壊し、家庭が作れないとなると、この社会は成り立たなくなる。崩壊している社会では、少子化は当然のこと、幼児虐待から幼児殺害にまで病んでいる。あるいは、少女が母親を毒殺しようとするまでになっている。国や社会の基盤である家庭や、隣近所が機能しなくなっている。そんな社会は荒れる。合理化・規制緩和の号令のもと、勝てばよい、儲かればよい、法に触れなければ一人一人が勝手にやりなさい、という社会は荒んで行く。親が子どもを大切に、愛していれば、子は親を大切に。家庭が豊かになる。隣人を大切に、愛すれば、隣人は隣人を大切に、地域協同体が成り立つ。国が若者や家庭を大切に、教育に力を注ぎ、フリーターやニートで若者を使い捨てるような社会ではなく、真に公正で豊かな生活を保障すれば、若者や家族は隣人を大切に、この社会、この国を守ろうとする。

チャップリンが、映画「ライムライト」の中で、人が生きていくのに必要なものとして「ドリーム、カレッジ、アンド サムマネー」と言っている。「幸せはお金では買えない」のである。金さえあれば何でも買える、と思う人や社会は、病んだ人であり社会である。お金は、生活するのに必要なだけあれば十分である。サム・マネーでよいのである。

もう一度我々は幸せとは何か、豊かさとは何かを自ら問い直し、子ども達にどんな社会を残していくべきか、再考すべきではないかと思う。



体感期間

(2006.3.1)



もう、幼稚園の一年が終わろうとしています。そして、子ども達の成長・発達の高さには驚くばかりです。4月入園当初は、あんなに小さく弱々しげで頼りない存在であったのに、今はもうすっかりたくましくなり、何でも自分でできるようになりました。赤ちゃんの様に不安定でヨタヨタと歩き、走るとすぐに転んでいたのに、かなりのスピードでしっかりと走っています。増えた語彙を使いこなし、友だちとよくお話をしています。悪い言葉をわざと使って、成長を誇示します。「エンチヨーゴリラ」なんて言って、私の注意を引こうとします。心も体も一年で大きくなりました。

歳をとると、時の経つのが本当に早く感じます。一年の体感期間は年齢分の一年、一日の体感期間も年齢分の一になる、という話を聞いて、なるほどと思ったことがあります。5歳の子どもの感じる一年の時の長さ、50歳の人のそれでは、10倍の差があることになります。

子ども達は一年の間に、新しい、たくさんの体験を通して大きく成長します。だから、幼児期ほど大切な時期はないのです。人間の基礎となるこの時期、たくさんの体験、多様な体験をして、充実した時間を過ごさせなければならないのです。異なる個性をもった多様な友達との関わりの中で、影響し合い、人と関わる力、社会力を身につけなければならないのです。テレビの前に座って一日中ボーと過ごさせ、時間を浪費させてはならないのです。

さて、私達大人も、子ども達に負けないように、色んな事物、色んな人との出会いをして、充実した日々を過ごすことで、時間を何倍にも使うことができると思います。



子どもって楽しい

(2006.4.7)



いつも堅苦しい話ばかりしているので、今回は、子どもとの会話から拾った楽しいお話しをします。綾小路きみまろは中年のおばさんの話ですが、綾小路エンチョウは子どものお話しです。

★『子どもは嘘つき?』

A君が「僕のお父さんは、おまわりさんなんだよ。とても強いんだ」というと、B君が「僕のお父さんは、もっと強いんだ。だってパトカーの運転手なんだ。」と言った。お母さんに会った時に、そのことを話すと「とんでもない、ウチの人は、酔っ払って保護され、後ろの席に乗せられるぐらいですよ。あの子はパトカーが好きですからね」と笑っていた。随分昔のことですが、C君がクラスのお友達に「僕のお父さんはエンチョウ先生なんだ」と言っていた。私は、「オイオイ、いい加減なことを言うなよ。誤解されたら大変だよ」と伝えた。C君は「分かったよ」と私の足にしがみつき離れなかった。後でその話をお母さんに伝えると、夕食の時に「アサダ先生がお父さんだといいのにナー」と言い出して、お父さんの機嫌が悪くなって困ったそうだ。嬉しいやら申し訳ないやら、ドキドキした。子どもは決して嘘つきではなく、かえって正直で夢想家で、思っていることを率直に口に出して大人をうろたえさせることがある。

★『僕はトラドシ!』

「園長先生、僕、柔道習っているんだ。柔道着を着てやるんだよ」とA君。するとB君が、「僕はお相撲をするんだ」と言うので、「B君はフンドシだね」と私。するとC君が「僕はトラドシだよ」・・・?!

★『自分のことは自分で』

鼻をほじくっては口に入れている子に、何度注意しても、すぐ又鼻をなめ始める。「そんなに鼻クソが好きなら、園長先生のもあげるよ」と鼻をほじくる仕草をし、鼻クソをつまんだようにして指を差し出すと、「自分のことは自分で食べなよ」と言われた。

★『さあ、行くぞー!』

棒とボールを持って、野球をやろうと子ども達が来た。「では、園長先生がピッチャーをやるから、投げたボールを打つんだぞ」と言ってバットを構えさせた。私が、「よし!行くぞ」と叫んで、モーションをとると、急に構えていたバットを下ろして、私のところへやって来て「何処へ行くの?」

堅苦しい教育論も必要ですが、私達はもっと子ども達との生活、子育てを楽しんでもいいのではないのでしょうか。子どもって本当に楽しい!



子どもって楽しいその2 『入園2日後の様子』

(2006.4.7)



私にとって、4月の幼稚園は楽しいものです。そして、嬉しいものです。子ども達の優しい心、楽しい心、嬉しい心が伝わってくるからです。

入園して間もない日、一日中雨が降り続けました。優しい大好きなお母さんと離れて悲しいのに、その上お外に出られないので、泣きたくなるのは当たり前です。泣いている子の中で、特に大泣きしている男の子と女の子を両脇にかかえ、軒下のベンチに座りました。猛烈に泣いていた女の子に向かって男の子が言いました。「うるさいナー」。しばらくして女の子が泣きながら言いました。「疲れたー」。それから又しばらくすると、今度は「お腹が空いたー」と、言いました。朝からかなりのエネルギーを消費したので、疲れてお腹が空いたのです。そして又、泣きますが次第にトーンが落ちていました。時折、泣き止んでするお話がとても楽しいのです。雨に打たれて、ダラーンと下がり、目刺しのように一列になった鯉のぼりを見ながら「お魚さん、良かったね。お水の中に入れて、お魚はお水がないと死んじゃうもんね」。私、「うん、良かったね。でもこのお魚は鯉のぼりと言って、お天気の時はお空をおよげるんだよ」と言うと、「わかった、だからお空も水も水色なんだ」などと言って、又泣き出します。自分の気持ちのまま、思いっきり泣けるなんて、素晴らしいと思いませんか？

翌日は、絹幼稚園に行きました。流石に登園直後は、“お母さーん”の大合唱でした。私が数人の子に手を差し出すと、みんなついて来ました。両手と後ろにカルガモの行列の様に、エーン、エーンと泣きながらついて来ます。すると、スーパー年少（満3歳入園児）だったS君が、「園長先生（まだ理事長と言えません）、ダンゴ虫採りに行こう」とやって来ました。そこでみんなを連れて、ダンゴ虫のいそうな丸太のところに行って、丸太をひっくり返しました。気味の悪いほどのダンゴ虫がいました。S君は大喜びでプリンのカップの中にたくさん入れました。泣きながら一緒に来たC子ちゃんが「私、ダンゴ虫大好き」と言うと、S君がC子ちゃんの小さな手の上に2匹乗せてあげました。そして、自分のポケットからハンカチを出して、C子ちゃんの頬に残っていた涙を拭いてあげました。最初は恐がっていた子も、みんな手を出してしっかりとダンゴ虫を握っていました。A子ちゃんは「お母さんにお土産に持って帰るんだ」と言っていました。お母さんはさぞ喜んだことでしょう。

その頃にはもう泣いている子は一人もいませんでした。10時半頃になり、「お帰りの仕度ですよ」の声で、お部屋に入ると、お兄ちゃん、お姉ちゃんとずっと一緒にいた子も、手を離れて部屋に入りました。すると、弟や妹の部屋に、お兄ちゃん、お姉ちゃんが、何度も何度も覗きに來ます。その顔が本当に心配そうなのです。弟がお兄ちゃんと離れる際に泣いた時、決して幼稚園で泣くことのないお兄ちゃんが、「お兄ちゃんは近くの〇〇組にいるから大丈夫」と言ってクラスに戻って、先生やみんなに背を向けて、袖でそっと涙をぬぐっている姿がありました。

幼稚園っていいでしょう！ 子どもっていいでしょう！

幼稚園の存在意義

(2006.5.1)



柔らかな新緑に包まれ、花々が一斉に咲き始める。風薫る5月、子ども達の季節です。この季節の幼稚園は、本当に楽しいのです。純真無垢の子ども達に、先生方は大忙しです。大泣きしている子を集め、手を握ってあげたり、股の間に挟んだり、両膝に乗せたりしている内に、みんな、私の姿を見つけると、ゾロゾロとついてくるようになります。ローレンツのカルガモのインプリンティングのようです。この人の傍にいれば安心だと思っているように、競って私の手を握ってきます。

最初は、お母さんから離れられずに、大泣きしていた子が、少しずつ泣かなくなり、一週間もすると、泣いていた子は一人もいません。一人だけ泣いていたA君が、私の姿を見ると、ニコニコしながら駆けて来て、自分を指差し「ほら、見てごらん、見てごらん」と言いました。私は訳が分からず「どうしたの、何を見るの?」と尋ねました。すると、「もう、泣いてないでしょー」と言いました。翌日、またニコニコ顔でやって来たので「オッ、今日も泣いてないね。大きくなったもんね」と言うと、笑いながら「ちょっと、バスに乗る時泣いちゃった」と悔しそうに言いました。こうして少しずつ幼稚園に慣れていきます。

幼稚園に慣れてくると、次第に地が出て来ます。自分の意志を通そうとします。しかし、家では勝手にやりたい放題にやっていたのに、幼稚園ではルールがあります。又思い通りにやろうとすると、そうはさせない他者がいます。いつも、自分が先だったのに、もっと強い奴もいます。そこで、泣いて、登園を嫌がる第2ラウンドが始まる子が出て来ます。

子ども達は**幼稚園という初めて出会う小さな「社会」**の中で、その**社会のルールと衝突し、他の子とぶつかり合い、葛藤し、協力し、反発し、共感し合います**。他者と同じ思いをする自分と、他者とは違う自分を発見し、**自我を形成していきます**。我慢する心、自己主張する力、自らを律する心、自分でチャレンジし自立する心を自らの中に育て、**他人や社会と折り合いをつけ、上手に生活する「生きる力」をつけていきます**。これらは目に見えないものですが、ここに幼稚園の存在意義があります。2、3ヶ月後、1～2年後、卒園する頃を楽しみにして下さい。



早寝・早起き・朝ごはん

(2006.6.1)



学校から帰ると、カバンを放り投げるようにして、又、外に遊びに行く。路地から路地を駆け回ってよく遊んだ。夕方、日が暮れなずむと、お腹がグウグウと鳴って家路に着く。お母さんの声が響く。「〇〇、もうすぐゴハンだよー」。丸いちゃぶ台を囲んでの温かい夕餉。決して豊かではないが、お母さん手作りの食事。食事の後は、遊び疲れて、風呂に入るとすぐに9時前には就寝。朝は6時前に起床して、家の前を掃除しラジオ体操をして、又、家族全員で朝食。これが生活リズムであった。朝は日が昇ると起き、夜は心地良い疲れと共にぐっすりと眠る。

こんな人間らしい生活が、いつの間にか奪われてしまって、朝食を食べない子、あるいは一人でわびしく冷たい弧食の子、夜は大人のペースでいつまでも起きていたり、朝もダラダラと起床し、不規則な生活を送っている子が増えている。

私達は、眠らない異常な社会の中で生活している。深夜のコンビニ、24時間営業の大型店には、親子連れの姿が見られる。テレビやゲームも朝まで続いている。引きこもり、非行といった子ども達の異常な行動の裏には、生活習慣の崩れが必ずある。昼と夜が逆転し、生活が崩れると、心も体も規範意識も崩れる。人間の生活は本来日の出と共に起き、日の入りと共に活動を休止する、という自然のサイクルの中で送ってきた。精神疾患の治療では、夜型から朝型に戻すことで改善が見られるという。早寝・早起き、朝食を取るようになって体力、学力がグンと伸びたという報告がある。生活習慣がしっかりすると背筋の通ったキチンとした姿勢の人間になる。三度の食事をしっかり取ると、学力、体力、気力が充実する。

政府は食育基本法を制定し、食育推進基本計画をまとめ、食育に乗り出した。文科省では「早寝・早起き、朝ごはんプロジェクトチーム」を組んだ。家族みんなで「早寝・早起き・朝ごはん」に取り組んでみて下さい。子どもの成長の責任は、親と家庭と幼稚園。



子育てのプロ

(2006.8.1)



友人のお母さんが、体調が悪くなり大学病院に1ヶ月入院した。精密機器による検査を続けたが、どこも悪いところがないということで退院した。ところが1ヶ月後に、検査で見つからなかったところが悪化して急死してしまった。そんな折、最も高齢、かつ最も有名な「日野原医師」の話が新聞に載っていた。「心臓の病気は、問診だけで6割わかる。聴診器による診察も加われば7割わかる。」「聴診器で身体の音を聞くと、多くのことが分かる。胸水がたまる、肝臓の腫れなど、病によって音や響きが違う。ところが今の医師は、問診もできず、聴診器も使えず、検査データに頼りすぎる。データがないと病気の見当もつかないから、検査づけにしてしまう。」と言う。

職人がいなくなった。その道のプロがいなくなったように思う。効率性と経済性が全てに優先し、できるかぎり早く、簡単に、そしてお金が儲ければ良いのである。仕事の内容が良い、しっかりしている、というような事は二の次である。建設では設計が良いかどうか、耐震性があるかより効率性が、エレベーターでは安全性より経済性が優先される。国民が安心して生活できる様に国の経済を守るプロであるべき日銀の総裁が、自分のお金を増やすことを優先してしまう。

大工さんにも、塗装屋さんにも、職人がいなくなった。社会が職人を育ててこなかった。職人は効率性や利益より、自分の仕事に誇りを持って、良い仕事をするのを優先させた。そして、社会が良い仕事をさせた。「安さ」ばかりを追求した私達がおかしかった。安値競争社会では、中味の充実や質は問われない。又、ブランド追求社会では、質を問う前にブランドで決められてしまう傾向がある。世の中が効率と安価を求めるから、商品にも、建築にも、職人技の良い製品は少なくなっている。

子育てにも言えるのではないか？例えばエサでも与えるような食事や、子どもの健康、成長を考えない食事、不規則な食事では心も体も健康な子どもは育たない。子どもの様子を見れば、具合が悪いのが分かるはずなのに気付かない。プロ保育者、子育てのプロは、子どもの心と体の変化にサッと気付く。名医日野原先生の言うように、問診と聴診器が使えなければならないと思う。問診、子どもとよく「会話」すること、そして、聴診器を当てるように、耳をそばだてて子どもの話を聞き取り、心の動き、体の変化に気付かなければならない。



ふたば文化幼稚園の目指すものとビジネススクールの教育目標

(2006.9.1)



ハーバード、スタンフォードなどの、世界有数のビジネススクールの学長に教育目標を尋ねると、異口同音の答えをしていた。はなはだ不遜な話と思うでしょうが「何だ、うちと同じじゃないか」と感じた。

世界最先端のビジネスマンを養成しているところであるから、高度な理論を学ばせている、という答えを期待していた。概略すると次の三つを挙げていた。一つは、独創的なものの考えができる人間を育てること、二つ目は、沢山の人をまとめて大きな力にするリーダーシップ能力を育てること、三つ目は、失敗から学び、克服し、成功につなげる能力であった。それならば、ふたば文化幼稚園の子ども達は、誰でもが日々追求していることであると思った。

一つ目の独創的な物の考え。いつも他人の号令や指示命令に従って動いたりせず、自分の頭で考え、その考えに従って行動する事である。自分で考えることこそ、独創的である。一斉保育中心の保育は、教師の主導によりがちで、子ども達は教師の指示、命令に従わざるを得ないことが多い。管理され、指示待ちになったところでは、自分で考えることは少ない。

二つ目のリーダーシップをとれる能力。人と関わる能力がなければならない。幼稚園は子ども達が初めて出会う「小さな社会」である。色々な子がいて、自分と違う他人、自分と同じ思いをする他人の間で、衝突し、葛藤し、理解し合うことにより忍耐力、思いやりが育ち、社会性が育つ。人を理解できることこそリーダーシップの基礎である。

三つ目の失敗を克服する能力。子ども達が自主的、主体的に、何かに取り組んでいれば、初めから成功することなど一つもない。赤ちゃんが歩き始める時、私達は手をたたき声あげ応援するが、歩き方を教え、指示する訳ではない。一歩歩き、二歩歩くと、私達は歓声をあげて歩けたことを喜び共感する。だから、赤ちゃんは倒れても、倒れても、チャレンジし、失敗を克服し成功に繋げる。人間には元々そういう能力があるのに、叱咤、命令し、他人と比較するから、失敗を恐れチャレンジしなくなってしまうのである。

ここまで読まれた方は、もうお分かりであろう。子ども達からこういう能力を奪った原因は「仲間」と「遊び」の喪失です。「遊び」は自由で、自発的で、自主的、主体的である。誰の指示命令もない。自分の意思で決め、自分の頭と体と心をいっぱいを使い、沢山の友達と交わりながら、失敗しても決して他人のせいにせず、何度も繰り返し挑戦しながら上手くなっていく。ふたば文化幼稚園は、ハーバードやスタンフォード・ビジネススクールの原点である人間の基礎となる能力の芽を育てている。



和顔愛語（わけんあいご）

(2006.10.1)



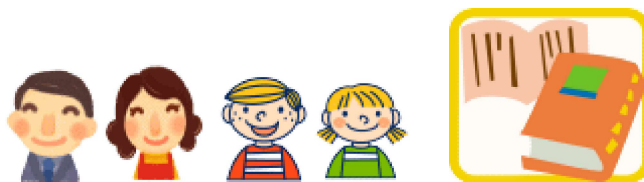
結婚式のスピーチを頼まれ、「花嫁にぴったりの挨拶は何か、どんなことを話してあげたら喜ばれるだろうか?」と考えました。そして、「和顔愛語」という言葉が頭に浮かびました。

先日、児童虐待防止に関する会議があった際に、子どもを虐待する大人の顔を思いました。正に鬼の形相です。そして、虐待された子も、鬼のような顔になってしまいます。最も安心して信頼する人に、虐待されるのである。虐待された子は、人を信じなくなります。社会を恨むようになります。反対に、親や周囲の人々に愛され、大切にされた子は、和やかなやさしい顔になります。

「和顔愛語」は仏教の教えの中で語られている言葉です。迷いのこの岸から、悟りの彼岸に渡る為には、自ら実践すべき六つの項目（六波羅密）があります。その第一に挙げられているのが人に恵みを施す布施です。布施というと、金品を贈ることと考えがちですが、例え金品がなくとも、周囲の人々に奉仕し、喜びを与えることができるのが「和顔愛語」です。柔和な、優しい笑顔で人に接すること、優しい言葉、励ましの言葉、誉め称える言葉、理解し信頼する事です。

怒り、険しい顔、気難しい不機嫌な顔、非難の言葉、怒鳴ったり叱りつける言葉は、避けたいものです。そうすれば、相手からも同じように返ってくるでしょうし、暖かい人間関係の中で生活できるようになります。「和顔愛語」は、人間が生きていく為の基本、最も大切なものであると思います。今日から、「和顔愛語」で子ども達に接してみてください。きっと心の優しい良い子に育ちますよ。

管理され、指示命令、自由を奪われるより、泥んこになり、伸び伸びと遊ぶ子どもの方がずっと幸せだし、柔軟な身のこなしや危険を避ける力も育たない環境の中で生活するのは、大きな危険を先送りしているだけではないかと思うのです。



管理と自由

(2006.11.1)

NOVEMBER 

新聞記事にアメリカの小学校で、鬼ごっこを禁止した話しが載っていました。子ども同士が衝突したり、足をひねってケガをすると、学校の責任を迫及されることが理由でした。最近、こういうことは良くあることです。ドッチボールは、顔面にぶつかる危険なので、ころがしドッチボールだけにした小学校や、ブランコの事故が多いので、ブランコを取り外してしまった幼稚園もありました。ある幼稚園を訪問した時のことです。園庭を走って来る子に向かって、「走ってはダメ!」と叫んだ先生がいました。私は、「先生、今、何て言ったの?」と聞いてしまいました。その先生は「アッ!」と言って絶句しました。「最近、先生の受け持ちの子がケガをして、クレームがあったんじゃない?」と尋ねると、うなだれました。

先日、ある有名な幼稚園を見学して来ました。流れのある大きな滝と、広大な敷地に豪勢な園舎、チリ一つ落ちていない園庭と保育室、ふかふかの絨毯の上に整然と並ぶ園児、正装のような服装、何もかも圧倒されました。外国人の先生がたくさんいて、園舎も子どもも室内もみんな綺麗なのです。しかし、何故か、心が沈みました。悲しくなりました。園舎と室内の美化にはもっと努力すべきと反省させられましたが、子どもは自由に、真黒になって遊ぶ方が良いと思いました。

翌日、自分の幼稚園に戻って、思い切り子ども達と遊びました。すぐに泥だらけになりました。絨毯の床だったら一日で泥だらけになると思いました。パンツのおしりに布あてがあって、何度も破けたところが縫ってある子がいました。肩のところがストッキングの様に肌がすけて見えるほど、着込んだシャツの子がいました。洗濯、縫物をしているお母さんの姿と深い愛情が目に見えます。今では、とても貴重なことになってしまった事が、ふたば文化幼稚園には残っています。

管理され、指示命令、自由を奪われるより、泥んこになり、伸び伸びと遊ぶ子どもの方がずっと幸せだし、柔軟な身のこなしや危険を避ける力も育たない環境の中で生活するのは、大きな危険を先送りしているだけではないかと思うのです。



あいさつ

(2006.12.1)



挨拶をいくらしても返ってこないことがあります。内気で恥ずかしがりやの子は、モジモジして声に出ないことがあります。しかし、内気な子でも、あいさつがしっかりできる子もいます。園によっても随分違います。この差はどこで生じるのか考えてみました。

先生が号令をかけ、一斉にあいさつする時は必ずできます。しかし、一人一人になるとできないことがあります。顔を合わせてもすぐには「あいさつ」をせず、先生が子ども達の前に立ち、向かい合っけきをつけをしてから形式的に「あいさつ」をすることがあります。中には、先生が「ごあいさつ、どうぞ」と声をかける（号令？）と、一斉に「おはようございます」と声を揃える「あいさつ」もあります。「ごあいさつ、どうぞ」と言ってするあいさつは本当の「あいさつ」でしょうか？百歩譲って、それも「あいさつ」だとしても、やはり心から自然に出てくるあいさつを交わしたいものです。

では、どうしたら、みんなが自然に「あいさつ」できるようになるのでしょうか。まず、周囲の大人がしっかりあいさつすることが第一です。しかし、それだけでなく、更に教え、伝えていかなければ「あいさつ」をするキッカケがつかめないことがあります。教え、伝えることは、決して強制・命令することではありません。自然に「あいさつ」ができるように、教え導くことであります。また、あいさつは「心」がなければなりません。心は態度、振る舞いに現れます。あいさつができなくて、モジモジしている様子で「心」を知る事ができることはありますが、言葉で伝えると、よりはっきりします。反対に、言葉だけ形式的に「あいさつ」をして、心がこもっていないことがあります。「ごあいさつ、どうぞ」と号令をかけられてから「あいさつ」する時の子ども達がそうです。

「あいさつ」は相手に不快な感じを与えない、最小限度のマナーです。目が合って挨拶をしたのに、あいさつが返ってこないのは不快です。あいさつは相手に対して、私はあなたの敵ではありません、仲良くしましょう、と相手を尊重し、好意を示すことです。心地良く生活する為のコミュニケーションの手段です。そこで先生方に以上のことをお話しし、みんな仲間で仲良しになりたいこと、「あいさつ」しないのは敵になっちゃうこと、だからみんなにきちんと「あいさつ」して欲しい、「あいさつ」すると自分も気持ちがいいし、みんなが気持ちよくなることを伝えてもらいました。更に、お家のご近所の人々、みんなにあいさつするように言って下さい、と頼みました。すると、翌朝から、ひとり一人に応答するのが大変なくらい「あいさつ」がありました。

